

とうきょう すくわくプログラム実践報告書

施設名	永山駅前こどもの家
施設所在地	多摩市永山1-4 グリナード永山4階
法人名	株式会社ライフケアサービス

1. 活動のテーマ

<テーマ>

サッカー教室

<テーマの設定理由>

姉妹園が入っているビル内のフットサルコートを練習拠点としているフットサルチームがあり、子どもたちにサッカーだけでなく体の動かし方やルールを守るといった規律性を伝えてほしいと要望しサッカー教室が始まった。商業施設内ではあるが多目的会議室を借りてマットや身近な道具を使って工夫して利用している。幼少期から行うことで体力や柔軟性、バランス感覚の向上、身体のコーディネーション能力を高めることを目的としている。

2. 活動スケジュール

毎月1回

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

多目的ホールを借りる 環境を整える(椅子・テーブルを片付ける・防音マットを貼る)ために職員を一人派遣

コーチ1名～3名

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

保育者がコーチの指示が子どもたちに届くように言い換えて伝えたり、一緒に活動することでサッカーへの理解を深める。また、身体の動かし方もわかりやすく伝えられるようにする。探究活動の様子は動画及び写真で記録する。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

コーチと挨拶を大きな声でする子・恥ずかしがり保育者から離れられない子と様々な様子を見せている。「やりたくない」と輪に入れないでいる子に保育者が「先生もやってみようかな。一緒にやってみよう」と声をかけると手を繋いで準備体操が出来るようになり、徐々に手を離し活動に入れるようになっていった。

回数を重ねるごとに慣れていき、コーチが目線を合わせ、スキンシップを図ると、徐々に距離が縮まっていった。コーチの声にも耳を傾けられるようになる。

保育者も一緒に活動することで、緊張もほぐれていったように感じる。

慣れてくると、コーチに近づきたい子も増え、膝に座るなど甘える姿が増えてきた。サッカーボールが出てくると、興奮し指示が聞こえなくなってしまうことがあった。保育者が、「コーチ見て！カッコいいよ」「すごいね！」とコーチに注意を向けると、コーチに注視することができた。しばらくは、ボールに慣れるため、自由に扱わせてもらった。手で触れる(投げたり転がしたり)・自由に扱ってみる子・サッカーボールを認識し扱い方を知っている子、様々な様子だった。慣れてくると、コーチが見本を見せると、コーチをじっくり見て真似ようとする子・真似ようとするが、うまくできずふてくされてしまう子・お構いなしで自由な子と様子が変わってきた。手を使わずにボールを扱うことにはなかなか慣れない様子だったが、「サッカーは手で触らないよね。」とコーチに確認する子がいた。コーチが「○○ちゃんすごいみて！」と注意をひくと、「○○もできる！」とライバル心を燃やす子が出てきて、コーチに褒めてもらうことが励みになってきたように感じた。レッスン終盤は疲れてしまう子もいたが、レッスンが終わり、帰園すると次回を楽しみにする声や感想を他の保育者に伝える姿が見られた。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

サッカーに必要な体の動きは2才児には難しいと思っていたが、「はしる」「とまる」「はねる」「前進」「後退」等基本的な動きを準備体操として繰り返すことで、回を重ねるごとに体幹に変化が出てきたように感じた。椅子に座る姿勢が良くなったり、寄りかかることが減ってきたり、生活の中でも変化を感じた。ボールコントロールはやはり難しいと感じるが、コーチの見本を見たり、話をじっくり聞く姿があったりと、子どもたちなりにボールに向き合うことができるようになった。イメージが先走り、コーチの指示が届かない子もいたが、職員が注意を向けることで、短時間でも指示通りに動こうとする姿があった。低年齢にサッカーのレッスンは、難しいと思っていたが、身近な保育者が一緒に楽しむこと・経験を共有することで、活動に意欲的に参加できた。コーチ陣も低年齢に指導することに慣れてきたことで、集中の緩急がついた。たくさん褒めてくれたことで、「サッカーできた」という自己肯定感が上がった。月に1回の活動だが、「サッカーががんばる」「○○コーチ来るかな」と楽しみにしている様子を感じた。後半になると、ドリブル(蹴る力加減)・動いているボールを片足で止める(片足バランス・空間把握)ができるようになる子が出てきた。これには少し驚いた。家庭内で兄弟がいたり、サッカー経験者がいたりボールが身近にある環境もあると思うが、経験をどれだけするかでポディーコントロールの身に付き方に差が出てくると感じ、経験することの大切さを実感した。